

プロタゴラス『神々について』断片と伝承

納富信留

1、プロタゴラスの著作『神々について』

プロタゴラスについて、ディオゲネス・ラエルティオス (DL)『哲学者列伝』は「現存する彼の書物」として12の著作名を報告している⁽¹⁾。ディオゲネスは、それらの内容を報告していないが、『真理』と『神々について』からは冒頭の1節を引用している。この2つの主著はおそらくプロタゴラスの死後に失われ、ディオゲネスも直接参照できなかったものと推測されるが、その2つの「断片」を古代の著述家たちはプロタゴラスの教説としてくり返し言及、批判してきた。「人間尺度説」として知られる『真理』冒頭部 (DK. 80B1) は、同時代のプラトンが『テアイテトス』で引用の形で報告しているため、後世ではそれを典拠にほぼ一定の扱いがなされていたが、『神々について』からの引用は不安定で問題が多い⁽²⁾。

私はライデン大学と共同でプロタゴラス証言集を編纂するにあたって、『神々について』を何らかの形で引用したり、それに明示的に言及する古代の証言を18箇所特定した⁽³⁾。本論考はそれらを逐一検討することで、プロタゴラスの1節

(1) DL. 9.55:『争論の技術』『レスリングについて』『数学について』『国制について』『名誉欲について』『諸徳について』『原初の状態について』『冥府の事について』『人々に正しくない行ないを為す者について』『教訓』『報酬の為の法廷弁論』『反論の技術』全2巻。ディオゲネス・ラエルティオス「プロタゴラス伝」については、拙論「プロタゴラス伝註解—古代哲学資料研究序説—」『フィロロギカ』2号、2007年のテキスト・訳・註を参照。

(2) 2007年7月にライデン大学で開催されたプロタゴラスについての国際学会で、私は「断片1：人間尺度説」に関する伝承史を検討した：“A Protagonist of the Sophistic Movement?: Protagoras in Historiography”。『神々について』の断片は、拙論「プロタゴラス伝註解」の註13で簡単に扱ったが、その議論は十分とは言えない。

(3) プロタゴラスについては、H.Diels & W.Kranz (DK. と略), *Die Fragmente der Vorsokratiker II*, Weidmann, Dublin/Zürich, 6. Aufl. 1952で50余りの証言と7つ程の断片が編纂されており、現在でも広く用いられている。M.Untersteiner, *Sofisti, testimonianze e frammenti I: Protagora e Seniade*, introduzione, traduzione e commento, La Nuova Italia, Firenze, 1^a ed. 1949, 2^a ed. 1961も基本的にディールスの資料集に依拠している。A.Capizzi (Cap. と略), *Protagora, le testimonianze e i frammenti*, edizione riveduta e ampliata con uno studio su la vita, le opere, il pensiero e la fortuna,

がどう伝承されたかを検証する。以下、この著作に関わる後世の言及のうち、元の語句を何らかの形で用いていると判断されるものを T (証言)、他の関連言及を R (参考) として紹介する。

『神々について』冒頭の 1 節は、プラトンの暗示に始まり前 1 世紀のキケロ以降くり返し取り上げられてきたが、同一語句での引用はない。私たちが参照するディールスとクランツ『ソクラテス以前哲学者の断片集』の「断片 4」も、再構成によって作り上げられた復元案なのである。

【DK. 80B4】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι, οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι ἢ τ' ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ
βίος τοῦ ἀνθρώπου.

ディールスは、DL とエウセビオス『福音の準備』の 1 引用を接合させて「断片 4」としたが、どちらも少しづつ変えて用いている。だが、ディールスの復元作業は網羅的ではなかったため、後に触れるように資料の扱いに重要な欠落があり、私たちは再度全資料を慎重に検討する必要がある⁽⁴⁾。

半世紀後にプロタゴラスの証言を編集したカピッシンによる復元案も見ておこう。

【Cap. B7 (p.207; cf. p.101, n.2)】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τοῦτον εἰδέναι.

現存する証言がどれも異なった形での報告を与えているという事実は、私たちにいくつかの仮説を許す。まず、プロタゴラスのこの著作は早い時点で消滅してしまい、冒頭の箇所だけが間接的に後世に伝えられたことが想定される。多様で不安定な伝承は、各引用者がおそらく原本からではなく、記憶での言及や孫引きをくり返した結果と考えられるからである。『真理』断片の場合とは異

G.C.Santoni, Firenze, 1955 が 40 程の証言を付加して DK. を再検討したが、イタリアでの出版ということもあり、一般に用いられるには至っていない。

(4) ディールスが復元に用いたのは、DL.9.51 (T1) と Eusebius, *Praeparatio evangelica* (PE), 14.3.7 (T11) の 2 つであったが、カピッシン、101-102, n.2 が指摘しているように、DK. はより重要な Eusebius, PE. 14.19.10 (=Aristocles, *De philosophia*, T12) を用いていない(註 35 参照)。ディールスが 1903 年に編纂した初版(74B4, p.519)では 6 語目の“εἰδέναι”が抜けているが、これは単なる欠落であろう。復元案はその時点から固まっていたことが判る。

なり、プラトンやアリストテレスに引用されない中で、別の系譜で引用が伝承されていた。

『神々について』冒頭部を現存証言から再検討する場合、以上のような制約を十分に意識しながら、引用の背景や意図や文脈に細心の注意を払う必要がある。ここでは「断片」の再構成という(ディールスが最重視した)目標にも増して、教説としての扱われ方という伝承史に焦点を当て、現存テキストの網羅的な分析から迫っていく。その作業では、古代後期に盛んになる「不敬神裁判、無神論者」といった話題を追うことも重要となる。ただ、今回はプロタゴラスを離れてその主題を独立に精査することは控える。また、プロタゴラスが前5世紀後半に、どのような背景から、どのような趣旨の主張を展開したのか、元の文脈の検討も必要となる。この課題にも別の論文で取り組みたい。

プロタゴラスが『神々について』と呼ばれる作品を著し、それをアテナイで発表して物議をかもしたことは、諸証言から疑いない。まず、後3世紀、ディオゲネス・ラエルティオスの2つの言及を見よう。

【T1 : Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum* 9.51-52 = DK.80A1】

καὶ ἀλλαχοῦ δὲ τοῦτον ἤρξατο τὸν τρόπον· “περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔθ’ ὡς εἰσὶν οὔθ’ ὡς οὐκ εἰσὶν.”⁽⁵⁾ πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι, ἢ τ’ ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου”. διὰ ταύτην δὲ τὴν ἀρχὴν τοῦ συγγράμματος ἐξεβλήθη πρὸς Ἀθηναίων, καὶ τὰ βιβλία αὐτοῦ κατέκαυσαν ἐν τῇ ἀγορᾷ ὑπὸ κήρυκι ἀναλεξάμενοι παρ’ ἐκάστου τῶν κεκτημένων.

また、別の箇所では、次の仕方では始めていた。「神々について私は、あるとも、ないとも、知ることができない。知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと」。その書き物のこの冒頭部故に、彼はアテナイ人たちから追放処分にあった。そして、彼らは彼の書物を公共広場で焼却した。伝達官の命で各所有者から回収して。

ディオゲネス (T1, R1) と、後に見るキケロ (T5)、エウセビオス (T11, 12)、スダ (T18) から、この引用部が著作の冒頭にあったことが確認される。また、この主張の含意が不敬神にあたるとしてアテナイで問題となり、おそらくは裁判にかけられて追放処分を受け、あるいは、焚書もなされたとされる。問題作とし

(5) εἶθ’ ... εἶθ’ (あるか、ないか), FD: οὔθ’ ... οὔθ’, BP ; エウセビオスの引用と合わせて一般に後者の読みが採用されている。

て知られたこの著作については、ディオゲネスがここで紹介する冒頭1節(3文)が最大範囲の引用となっており、この箇所以外は一切内容が知られていない⁽⁶⁾。但し、DLには著作にまつわる逸話が残されている。

【R1 : Diogenes Laertius, *Vitae philosophorum* 9.54 = DK.80A1】

πρῶτον δὲ τῶν λόγων ἑαυτοῦ ἀνέγνω τὸν Περὶ θεῶν, οὐ τὴν ἀρχὴν ἄνω παρεθέμεθα· ἀνέγνω δ' Ἀθηναίων ἐν τῇ Εὐριπίδου οἰκίᾳ ἢ, ὡς τινες, ἐν τῇ Μεγακλείδου· ἄλλοι ἐν Λυκείῳ, μαθητοῦ τὴν φωνὴν αὐτῷ χρῆσαντος Ἀρχαγόρου τοῦ Θεοδοῦτου.

自分の言論で最初に読み上げたのは『神々について』で、その冒頭部を私たちは上で引用した。彼はそれをアテナイで、エウリピデスの家、あるいは、ある人々によれば、メガクレイデスの家で読んだ。別の人々は、リュケイオンで、彼の弟子であるテオドトスの子アルカゴラスが彼に代わって声を出した〔代読した〕としている。

この書物は、他の書物同様、アテナイ人有識者の前で読み上げられたようである。ただ、この出来事の証言はここにしかなく、最初期に読み上げた著作が原因となって晩年に裁判に掛けられるという時間的隔たりにも問題がある。

ここでディオゲネスは『神々について』(Περὶ θεῶν)という著作名に言及しているが、エウセビオスでも同じ標題が報告されている⁽⁷⁾。他方、テオドレトスは“τοὺς ἀμφιβόλους περὶ τοῦ θεοῦ καὶ ἀπίστους λόγους”と語っているが、その言及は書名としてのものではなからう⁽⁸⁾。そこで定冠詞と単数型が使われている以外は一貫して“Περὶ θεῶν”(無冠詞で複数型)となっており、著作タイトルとして定着していたことが判かる。このタイトルは、プロタゴラス自身によって付

(6) 神々についてのプロタゴラスの考えには他に一切の証言がないことから、この主題で1巻の書物を成したかどうか、疑問を呈する研究者もいる(e.g. W.Jaeger, *The Theology of the Early Greek Philosophers*, Oxford, 1947, 189)。冒頭で「知り得ない」と語った以上、それ以上の議論は確かに想像しにくい。その場合、多様な主題を扱った議論集の一部であった可能性もある。M. Untersteiner, *I Sofisti* 1, 2^a ed., 1967, 30-3, 55-57 は、これを『反論集』(Ἀντιλογία)の第1部と見なしている。

(7) Cf. Eusebius, *PE*. 14.3.7 (T11), 14.19.10 (T12) ; Joannes Chrysostomus, *In epistulam I ad Corinthios* 36-37 (T13の後)でも“ἐν τοῖς περὶ θεῶν λόγοις”という表現が見られるが、これはプロタゴラスの著作に限らない。Sextus, *M*.9.55では無神論者テオドロスにも同じ標題の著作が帰されており、古代で広く用いられていたことが判る。

(8) Cf. Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 2.113 (T14).

けられたか、あるいは、冒頭の字句がそのまま流通したことが考えられるが、『真理』という標題(冒頭の字句でないことに注意)にはプラトンが『クラテュロス』『テアイテトス』で揶揄を向けていることから⁽⁹⁾、こちらも同様に本人によって付けられたと見なしてよかろう。

2、証言の検証

(1) 初期の証言

前5世紀後半では、喜劇や悲劇での曖昧な暗示を除いて証言は残っていない⁽¹⁰⁾。前4世紀前半に対話篇を執筆したプラトンも、『真理』とは異なり『神々について』を明示的に取り上げることはなかったが、『テアイテトス』にはそれと分かる仕方での暗示がある。

【T2 : Plato, *Theaetetus* 162d-e = DK.80A23】

θεοὺς τε εἰς τὸ μέσον ἄγοντες, οὓς ἐγὼ ἔκ τε τοῦ λέγειν καὶ τοῦ γράφειν περὶ αὐτῶν ὡς εἰσὶν ἢ ὡς οὐκ εἰσὶν, ἐξαιρῶ...

君たちが真中に持ち出している神々とは、私が彼らを、あるか、ないかを語ったり書いたりすることから取り去っているところのものなのだ。

プラトンは「人間尺度説」批判の文脈で(想像上の)プロタゴラスにこう語らせることで、冒頭1行を読者に想起させている。プラトンは正名論などプロタゴラスの多様な主張を統一的に批判する戦略を採っており、ここでも「人間」を万物の尺度とする考えを「神々」の知恵との対比で吟味している⁽¹¹⁾。この批判

(9) Cf. *Crat.* 386c, 391c (DK.80A24), *Tht.* 161c (B1), 166d (A21a).

(10) 喜劇では前421年上演のエウポリス『追従者たち』*Kolakes*にプロタゴラスが登場するが、断片157 PCG (= DL. 9.50 + Eustathius, *Commentarii ad Homeri Odysseam* 1. 1547 = DK.80A11)の“ἀλιτήριος”という語が彼の不敬神を示唆するものとも推測されている(I. Storey, *Eupolis*, Oxford, 2003, 184-188は関連を否定)。また、アリストファネス『雲』の無神論的言説を(メロス人ディアゴラスと共に)プロタゴラスに帰する見方もある。悲劇では、エウリピデス『バツカイ』199-203での神々に関する言及が暗示とされている(DK. 80C4)。

(11) ソクラテス:テアイテトス、言ってくれ。最初に、今し方述べたことだが、突然、君が知恵の点で人間の誰かだけでなく、神々のうちの誰に比べても少しも劣らないのだと現れてしまったら、驚きはしないかね。それとも、プロタゴラスの尺度とは、神々に対しては人間に対して、より少ない意味しかもたないもの

は、『法律』での「神が万物の尺度である」という主張に帰着する⁽¹²⁾。

『神々について』への最初の明瞭な言及は、ティモンの諷刺作品『シロイ』（前3世紀；セクストスがT9の後で引用）に遡る。

【T3 : Timon, *Sylloi* II, fr. 5.3-6 PGF (Diels, 1901) = *Supplementum Hellenisticum* 779 (H.Lloyd-Jones & P.Parsons eds., 1983) = Sextus, *M.* 9.57 (DK. 80A12)】

... ἔθελον δὲ τέφρην συγγράμματα θείναι,
ὅτι θεοὺς κατέγραψ' οὐτ' εἰδέναι οὔτε δύνασθαι
ὄπποιοί τινές εἰσι καὶ εἴ τινες ἀθρήσασθαι,
πάσαν ἔχων φυλακὴν ἐπεικειῖς·

人々は彼の書き物を灰に帰そうとした。というのは、彼は神々について、あるかどうか、また、どのようなものであるか、知ってもおらず、観取することもできないと、書いていたからである。適正さにあらゆる注意を払い。

この自由なパラフレイズも、他の証言と比べることで、原文を何らかの仕方
で反映していることが判かる。また、この後には、プロタゴラスが不敬神で弾
劾されたという最古の証言がある。

(2) キケロとエピクロス派

キケロ（前1世紀）は、『神々の本性について』第1巻でプロタゴラスを計4
回取り上げ、最初の本格的な報告を残している。著作冒頭近くでキケロは、神々
について哲学者たちの意見が異なることを述べ、神々の存在を認める人々との
対比で、懐疑的なプロタゴラスと神の存在を否定したディアゴラス、テオドロ
スの3名を挙げる⁽¹³⁾。

【R2 : Cicero, *De natura deorum* 1.1.2】

velut in hac quaestione plerique - quod maxime veri simile est et quo omnes⁽¹⁴⁾ duce
natura venimus - deos esse dixerunt, dubitare se Protagoras, nullos esse omnino

として語られているのかね。(Th. 162c)

(12) Cf. *Leges* IV.716c ; 理想的法律の前文での宣言。

(13) キュレネ出身のテオドロスは前3世紀に『神々について』を著した無神論者
で、同出身地で同名の数学者テオドロス（前5世紀、プラトン対話篇の登場人
物にもなっている）とは別人である；*RE*, 'Theodoros (32)' (K. von Fritz)、三嶋輝
夫「小ソクラテス学派」内山勝利編『哲学の歴史1』中央公論新社、2008年、
381-385参照。

(14) omnes fere, Plasberg, Dyck: sese, ω.

Diagoras Melius et Theodorus Cyrenaicus putaverunt.

この問いについては、ほとんどの者は神々があると主張してきた—それがもっとも真理に近いし、自然の導きで私たちすべてがそこに至る—が、プロタゴラスはそれに疑いをかけ、メロス人ディアゴラスとキュレネ人テオドロスはまったくないと考えた。

ここでは、プロタゴラスが他2人の「無神論者」と明瞭に区別されていることが注目される。続いてエピクロス派の立場から登場人物ウェレイウスが、神々に関する哲学者たちの説を通覧し批判する学説誌的記述で、プロタゴラスを取り上げる。

【T4 : Cicero, *De natura deorum* 1.12.29 = DK. 80A23】

nec vero Protagoras, qui sese negat omnino de deis habere quod liqueat, sint non sint qualesve sint, quicquam videtur de natura deorum suspicari.

プロタゴラスも、神々について、あるか、ないか、どのようなものであるか、明らかかなことを持っていることを完全に否定していた。彼は何であれ神々の本性について疑っていたように見える。

次に、アカデメイア派を代表するコッタがエピクロス派に反論する中で、ディアゴラスとテオドロスら無神論者と並べて『神々について』冒頭部を紹介する。ウェレイウスによる、すべての人間に神の存在は認められているという前提に、彼自身の言及を逆用して批判と懐疑を向けるのである。

【T5 : Cicero, *De natura deorum* 1.23.63 = DK. 80A23】

nam Abderites quidem Protagoras, cuius a te modo mentio facta est, sophistes temporibus illis vel maximus, cum in principio libri sic posuisset, “de divis neque ut sint neque ut non sint habeo dicere”, Atheniensium iussu urbe atque agro est exterminatus librique eius in contione combusti.

あなたに言及されたアブデラの人プロタゴラスは、当時もっとも偉大なソフィストであったが、書物の冒頭で「神々について、あるとも、ないとも、私は言うことはできない」と述べていたので、アテナイ人たちの決議で市内からも田舎からも追放されて、彼の書物は集会の場で焼かれたのである。

ここでは引用に近い紹介が与えられているが、「ある、ない」の選択肢のみで「どのようなであるか」の句が欠如している。コッタの関心が、神々の存在を誰もが認めていた訳ではないという反証に向けられていることに影響されたもので

あろう⁽¹⁵⁾。

【T6 : Cicero, *De natura deorum* 1.42.117】

ego ne Protagoram quidem, cui neutrum licuerit, nec esse deos nec non esse.

私としては、神々があることも、ないことも、どちらも確かではないとしたプロタゴラスも〔迷信家には数えない〕。

T6でコッタはプロタゴラスを、ディアゴラス、テオドロス、プロディオコスら「無神論者」と並べるが⁽¹⁶⁾、懐疑派はこういった素材を縦横に用いてエピクロス派などを批判していたのである。

キケロがプロタゴラスを他の問題ある人々と並べる時に、それ以前の「学説誌」記述を参照し、それを何らかの形で反映していたことが考えられる。神に関する事柄では、アリストテレスの弟子であったロドスのエウデモスが『神的な事柄の学説誌』全6巻(τῶν περὶ τὸ θεῖον ἱστορίας α'-ζ')を著したという証言があるが⁽¹⁷⁾、他に確固たる資料はなく、テオフラストスにも『神的な事柄の学説誌』全6巻(τῶν περὶ τὸ θεῖον ἱστορίας α'-ζ')、『神々について』全3巻(περὶ θεῶν)の著作があったと報告されている⁽¹⁸⁾。いずれにしても、アリストテレス学派で自然科学研究の一部として「神々」をめぐる学説が整理されていたことが推定される(そこでのプロタゴラスの扱いについては、後で考察する)。

キケロと同時代のフィロデモスの現存(現在まで校訂された)パピルスに、プロタゴラスへの直接の言及はない。だが、重要な関連箇所が2つある。

【R3 : Philodemus, *De pietate* col. 22.1-4 (Gomperz) = DK. 80A23】⁽¹⁹⁾

ἢ τοὺς ἄγνωστον [εἶ] τινες εἰσὶ θε[οῖ] λέγ[ον]τας ἢ ποῖοί τινές εἰ[σ]ιν...

神々があるかどうか、また、どのようなものであるか、知り得ないと主張する人々を…

(15) ここで「姿形がどのようなものであるか」の句が欠如していることに、ダイクは続く65節でこの主題が取り上げられるから、と註記している(A.R.Dyck, *Cicero, De Natura Deorum Book I*, Cambridge, 2003, 144)。その理由で十分とは言えないが、引用者(コッタ/キケロ)が自らの目的と文脈で適宜表現を変えて用いていることはあり得る。

(16) プロディオコスの無神論については、DK. 84B5 (Sextus, *M.9.18*)参照。*M.9.51-52*では、エウエメロス、ディアゴラス、プロディオコス、テオドロスが取り上げられている。

(17) Cf. Damascius, *Dubitationes et solutiones de primis principiis*, 124, I.319 (Ruelle) = fr. 150 (Wehrli).

(18) Cf. DL. 5.48; テオフラストスの著作名からも、『神々について』という標題が当主題を扱う際に一般に用いられていたことが判る。

(19) Th.Gomperz, *Philodem, Über Frömmigkeit, Erste Haupttheil*, Leipzig, 1866, 89.

ディールスはこれがキケロ『神々の本性について』(1.12.29; T4)と同じ源泉によるものとしているが、パピルスに問題があるのか、オビンクの新しい校訂版にはこの箇所が含まれていない⁽²⁰⁾。

【R4 : Philodemus, *De pietate* 1.519-530 = 1077 col. 19.1-15 (Obbink)】⁽²¹⁾

καὶ πᾶσαν μ[ανίαν Ἐ]πίκουρος ἐμ[έμψα]το τοῖς τὸ [θεῖον ἐ]κ τῶν ὄντων
[ἀναι]ροῦσιν, ὡς κἀ[ν τῶι] δωδεκάτω[ι Προ]δίκωι καὶ Δια[γόρ]αι καὶ Κριτία
καὶ[λλοις] μέμ[φεται] φᾶς πα[ρα]κόπτ[ει]ν καὶ μ[αίνεσ]θαι, καὶ βακχεύουσιν
αὐτοὺς [εἰ]κά[ζει], ...

エピクロスは、神的なものを存在者から除去する人たちを、全くの狂気と非難した。『自然について』第12巻で、プロディコス、ディアゴラス、クリティアスと他の人々を錯乱し狂っていると行って非難し、バッカスの信徒に喩えている。

フィロデモスはここでエピクロス『自然について』第12巻における無神論者批判を紹介しているが、プロディコス、ディアゴラス、クリティアスと「他の人々」と言っている。オビンクは註釈でここにプロタゴラスが含まれる可能性を示唆するが、プロディコスやクリティアスよりも著名であった(はずの)プロタゴラスの名を省略することは考え難い。むしろ、エピクロス自身はプロタゴラスを「神々を存在者から除去する人たち」に含めていなかったと考える方が自然であろう。エピクロスは他の文脈で、プロタゴラスの職業に触れてデモクリトスの弟子となったという(誤った)伝記記述を与えているが、プロタゴラスに批判的であったようには見えず、神々に関してもプロタゴラスの立場を別の仕方で見えづけていたものと考えられる。

エピクロス派のオイノアンダのディオゲネス(後2世紀)は、エピクロス派が神の存在を否定してはいないことを論じる際に、ディアゴラスとプロタゴラスを無神論として批判している。

【T7 : Diogenes Oenoandensis, fr. 16, II.1-III.14 (Smith) = DK. 80A23】⁽²²⁾

Πρωταγόρας δ' ὁ Ἀβδηρῆιτις τῇ μὲν δυνάμει τὴν αὐτὴν ἤνεγκε Διαγόρα

(20) Cf. H.Diels, *Doxographi Graeci*, Berlin, 1879, 535 (cf. 123). ゴンペルス版とオビンク版の違いについては、今後調査していく。

(21) D.Obbink, *Philodemus, On Piety, Part 1*, Oxford, 1996.

(22) M.F.Smith, *Diogenes of Oinoanda, The Epicurean Inscription*, Bibliopolis, Napoli, 1993, 174-176.

δόξαν, ταῖς λέξεσιν δὲ ἑτέραις ἐχρήσατο, ὡς τὸ λείαν ἰταμόν αὐτῆς ἐκφευξόμενος. ἔφησε γὰρ μὴ εἰδέναι εἰ θεοὶ εἰσιν. τοῦτο δ' ἐστὶν τὸ αὐτὸ τῷ λέγειν εἰδέναι ὅτι μὴ εἰσιν. εἰ μὲν γὰρ ἀντιτεθῆκει τῇ πρώτῃ φωνῇ “οὐ μὴν ὅτι μὴ εἰσιν”, [ἴσως ἂν] σχεδὸν εἶχε π[ε]ρ[ι]φ[ρ]α[σ]ίν τινα πρὸς [τὸ μὴ δο]κεῖν τελῶς ἀ[ν]αιρεῖν τοὺς θεοὺς. εἶπε δὲ τὸ “εἶναι αὐτούς”, [ἀλλ' οὐ τὸ] “μὴ εἶναι”, τὸ ἀ[κ]ρειβῶς ποιῶν ἴσον Δ[ια]γόρῳ, ὃς εἰπὼν τὸ μὴ [εἰ]δέναι ὅτι εἰσιν ἀύπ[νω]ς οὐκ ἐπαύσατο. τ[ο]ιγαροῦν, ὥσπερ λέγω, ἦτ[οι] τότε τῇ δυνάμει ὁ [Π]ρωταγόρας ἤενεκε [τὴν αὐτὴν Διαγόρῳ δόξαν ἢ]

アプデラの人プロタゴラスは、ディアゴラスと実質的に同じ考えを提出しているが、異なる語り方を用いており、過剰な大胆さを避けようとしている。というのも、彼は「神々があるかどうか、知らない」と語っているが、それは、「神々がないと、知っている」と主張するのと同じなのである。もし彼が、最初のフレーズ〔「神々があるかどうか、知らない」〕に「神々がないとも、知らない」と対置していたのなら、おそらく神々を完全に否定するという見かけを避ける適切な婉曲的言い回しとなっていたことだろう。しかし、彼は「彼ら〔神々〕があることを〔知らない〕」と言っているのであり、「彼らがないことを〔知らない〕」とは言っておらず、「神々がある」と知らないと休みなく主張して止まなかったディアゴラスと、正確に同じことをしている。従って、私が述べたように、プロタゴラスは実質的にディアゴラスと同じ考えを提出しているのである。

ここでディオゲネスがディアゴラスとプロタゴラスを並べている点は、フィロデモスの議論（エピクロス『自然について』第12巻に由来?）と異なっており、従って、この批判はディオゲネス独自のものである可能性が高い。「神々があるかどうか、知らない」という主張を批判する際には、ティモン (T3) やフィロデモス (R3) が紹介する「神々があるかどうか、また、どのようであるか、知り得ない」といった伝承が用いられているのであろう。もしキケロラの報告に含まれる「神々はない、とも知り得ない」という選択肢を考慮に入れていたのなら、ディアゴラスと同じ主張をしているという等値は不可能であったはずである。このような、プロタゴラスの元の主張への誤解（と私たちが判断するもの）が、古代における伝承過程を逆照射する。

(3) 不敬神者のリスト

アレクサンドリアのフィロン(紀元前後)は、プロタゴラスの不敬神について「人間尺度説」に言及して、彼をカインと比べている⁽²³⁾。そこでの「不敬神の考え」(ἀσεβοῦς δόξα)という表現は「不敬神裁判」への言及であるが、背後に『神々について』が意識されているはずである。

フラウィオス・ヨセフス(後1世紀)は、ソクラテス裁判に関連して、アナクサゴラスが「太陽」を論じた不敬神、さらにメロス人ディアゴラスに言及し、プロタゴラスも「神々についてアナテイ人たちに同意されないことを書き著したと思われた」(γράφαι τι δόξας οὐχ ὁμολογούμενον τοῖς Ἀθηναίοις περὶ θεῶν)と紹介している⁽²⁴⁾。このリストは、アテナイにおける「不敬神」の逸話を集めたものであり、プロタゴラスはすばやく逃亡したために死刑を免れたとされる。同様に、プルタルコス『ニキアス伝』もプロタゴラスの追放に触れ、アナクサゴラスとソクラテスの不敬神と併置している⁽²⁵⁾。この時代までに古い時代の「不敬神裁判」についてリストが定着し、こういった思想家の名前が挙げられていたものと推定される⁽²⁶⁾。

リバニオス(4世紀)の演示作品『ソクラテスの弁明』153-154では、ソクラテス裁判に関連して、アナクサゴラス、プロタゴラス、ディアゴラスを併置している。

【T8 : Libanius, *Apologia Socratis* 153-154】

Πρωταγόραν ἐξεκηρύξατε καλῶς καὶ προσηκόντως ζητοῦντα περὶ θεῶν εἶτ' εἶσιν εἶτ' οὐκ εἶσι.

神々について、あるか、ないかを探求したプロタゴラスを、君たちは立派にかつ適切に公的追放にした。

これらの言及はプロタゴラスを、発言や思想の内容よりも、不敬神裁判とい

(23) Philo Judaeus, *De posteritate Caini* 35 (cf. 38).

(24) Flavius Josephus, *Contra Apionem* II.266.

(25) Plutarchus, *Nicias* 23.3 (= DK. 59A18, Cap. A11a).

(26) アテナイオス(2～3世紀)は『食卓の賢人たち』13.611A-Bでソクラテスらの裁判に触れ、テオドロスも死刑になり、ディアゴラスは追放されたと紹介している。ここにプロタゴラスの名はないが、ディアゴラスが航海の途上で難破したという伝承はプロタゴラスとの混同と見なされている。ヴィラモヴィッツ＝メレンドルフはここに欠損を想定しており、カイベル(Teubner版、1890)はその提案に従って“ἐξεκηρύχθη καὶ Πρωταγόρας”の字句を補っている。

う事件の文脈で扱っており、その罪に関わるとされた人々のリストが何らかし流布していたことが推測される。最初の証言者ティモンも、プロタゴラスの不敬神裁判をソクラテスの毒杯と比べていた⁽²⁷⁾。

他方で、アエティオス『自然学説の摘要』を用いたと推定されている偽プラタルコス『学説摘要』「神とは何か」の項では、メロス人ディアゴラス、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロスが神の存在を否定した人々として挙げられているが、プロタゴラスには触れられていない⁽²⁸⁾。ディールスの復元通りこれがアエティオス(150年頃)に由来するとしたら、その学説誌ではプロタゴラスは「無神論者」として扱われていなかった可能性が高い。プロタゴラスは神々の存在について懐疑を投げかけたが、それは不可知論ではあっても無神論ではなかったことが、その理由であろう。それは、テオフラストス以来の学説誌での扱いを反映したものであったと推測される。

他方で、プロタゴラスが無神論者として扱われている学説誌資料もある⁽²⁹⁾。エピファニオス(4世紀)の『異教徒論駁』では、プロタゴラスが神の存在を否定したとはっきり整理されている。

[R5 : Epiphanius, *Adversus Haereses* 3.2.9, 3.16 (DG.591) = Cap. A23]

Πρωταγόρας ὁ τοῦ Μενάνδρου Ἀβδηρίτης ἔφη μὴ θεοὺς εἶναι μηδὲ ὅλως θεὸν ὑπάρχειν.

メナンドロスの子でアブデラの人プロタゴラスは、神々はおらず、総じて神は存在しないと主張した。

学説誌はフレキシブルに素材を付加したり編集しながら継承されていったも

(27) Timon, *Sylloi* fr. 5.8 PGF = *Supplementum Hellenisticum* 779 = Sextus, *M.* 9.56 (= DK. 80A12)

(28) [Plutarch] *Epit.* 1.7, Τίς ἐστὶν ὁ θεός = Aetius, *Plac.* 1.7.1 (DG. 297); ストバイオス『自然学・倫理学抜粋集』「神について」には対応する箇所がない (cf. Stobaeus, *Eclogae physicae et ethicae*, I.1 (2), Περὶ θεοῦ = DG. 297-307)。

(29) 偽ガレノス『哲学誌』の無神論者リストでは、キューン版では「エレオン人プロタゴラス (Πρωταγόραν τὸν Ἡλείον)、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロス」が「あえて神々はないと語った」(οὐ γὰρ εἶναι θεοὺς εἰπεῖν τετολήμασιν) とされている (*Medicorum Graecorum Opera* XIX, ed. Kühn (1830), 250; [Galenus], *De historia philosophica* 2.29, Περὶ θεοῦ)。しかし、ディールス版の35節 (DG. 618) では、プロタゴラスの代わりに「メロス人ディアゴラス」(Διαγόραν τὸν Μήλιον) と印刷されている。テキスト校訂上の問題と思われるが、後者に註記はない。ディールス版の読みを採ると、プロタゴラスはやはり無神論者に含まれていなかったことになる。

のであり、不十分な現存資料からではあるが、プロタゴラスが遅い時期に神否定論者に加えられたと考えるのは自然であろう。プロタゴラスの扱いとしては、エピクロス―フィロデモスからオイノアンダのディオゲネスへの変化と同様に、学説誌において当初「無神論者」に含まれていなかったプロタゴラスが、やがて単純化され、そう見なされた過程が想定される。

テュロスのマクシモス(2世紀)は神々についてのプラトンの学説に関連して、その反対の立場にある者を列挙して、レウキッポス、デモクリトス、ストラトン、エピクロス、そしてディアゴラスとプロタゴラスを挙げている⁽³⁰⁾。ここでは、ディアゴラスが神の存在を否定したのに対して、プロタゴラスは「(神々が)何であるか知らない」(ἀγνοεῖν τι)と主張していた者とされる。これは、神を否定する立場がかなり多くの思想家を含むことを示している。ミニキウス・フェリクス(3世紀)も、プロタゴラスをキュレネ人テオドロスやメロス人ディアゴラスと併置している⁽³¹⁾。

このような扱いの流れで、懐疑主義者セクストス(2～3世紀)は「神々について」の先行学説を対置的に紹介するにあたって、プロタゴラスから引用を行っている。

【T9 : Sextus Empiricus, *Adversus mathematicos* 9.55-56 = DK. 80A12】

συμφέρεται δὲ τούτοις τοῖς ἀνδράσι καὶ Θεόδωρος ὁ ἄθεος καὶ κατὰ τινὰς Πρωταγόρας ὁ Ἀβδηρίτης, ... ὁ δὲ Πρωταγόρας ῥητῶς ποὺ γράψας “περὶ δὲ θεῶν οὔτε εἰ εἰσὶν οὔθ’ ὁποῖοί τινές εἰσι δύναμει λέγειν· πολλὰ γὰρ ἐστὶ τὰ κωλύοντά με”. παρ’ ἣν αἰτίαν θάνατον αὐτοῦ καταψηφισαμένων τῶν Ἀθηναίων διαφυγὼν καὶ κατὰ θάλατταν παισίας ἀπέθανεν.

無神論者テオドロスもこれらの人々と同様であり、ある人々によれば、アプデラの人プロタゴラスもそうである。(略)プロタゴラスはある箇所でははっきりとこう書いている。「神々については、あるかどうか、どのようであるかも、私は言うことができない。というのは、私を妨げることは多いから」。これが原因で、彼はアテナイ人たちから死刑評決を受け、逃亡したが海に落ちて死んだのである。

神々の存在を否定する議論を紹介していく中で、エウエメロス、ディアゴラス、プロディコス、クリティアスら無神論者に続いてプロタゴラスが扱われている。

(30) Maximus Tyrius, *Dialexeis* 11.5 (Τίς ὁ θεὸς κατὰ Πλάτωνα) = Cap. A23.

(31) Minucius Felix, *Octavius* 8.3 = Cap. A23.

セクストスは慎重に、プロタゴラスを「無神論者」と同等に扱うのが一部の人々の見方であると注意している。この後で、ティモンの『シロイ』(T3)が引用されている。

(4) キリスト教徒による批判

キリスト教の著述家たちの間でも、異教徒の「無神論」を批判する文脈でプロタゴラスへの言及が常套化する。

アンティオキアの司教テオフィロス(2世紀)は、神々についての哲学者たちの矛盾を論じて、アカデメイア派のクレイトマコスから始めて、クリティアス、プロタゴラス、エウエメロスを無神論者として紹介する。このリストはキリスト教徒以外の著述家のものと重なる。

【T10 : Theophilus, *Ad Autolyicum* 3.7 = Cap. A23】

τί δ' οὐχὶ καὶ Κριτίας καὶ Πρωταγόρας ὁ Ἀβδηρίτης λέγων. “εἴτε γὰρ εἰσιν θεοί, οὐ δύναμαι περὶ αὐτῶν λέγειν, οὔτε ὁποιοί εἰσιν δηλώσαι· πολλὰ γὰρ ἔστιν τὰ κωλύοντά με”.

では、クリティアスやアブデラの人プロタゴラスはどうか。彼はこう言っている。「神々があるかどうか、彼らについて、語ることを私はできず、どのようであるかも明示できない。というのは、私を妨げることは多いのだから」。

4世紀初めにラクタンティウスは、2つの著作でプロタゴラスに言及する。『神聖な教理』で、デモクリトス、エピクロスに続いて、神々に懐疑を呈したプロタゴラスと神の存在を否定したディアゴラスを挙げ、『神の怒りについて』では、神々の世界について人間理性では到達できないとする論者としてプロタゴラスに言及している⁽³²⁾。

アウグスティヌス(4～5世紀)は『ペティリアヌスの手紙批判』で「神があることを否定した無神論者プロタゴラス」(atheus Protagoras, qui esse deum negavit)をアカデメイア派の懐疑論者と並べて論じている⁽³³⁾。

もっとも重要な証言を含む、カイサリアの司教エウセビオス(4世紀)の『福音の準備』では、第14巻の中で2箇所異なった紹介がなされている。

【T11 : Eusebius, *Praeparatio evangelica* 14.3.7 = DK. 80B4 = Cap. B7】

(32) Lactantius, *Divinae institutiones* 1.2.2 = Cap. A23: “Protagoras qui deos in dubium vocavit”; cf. *De ira Dei* 9.1-2 = Cap. A23.

(33) Augustinus, *Contra litteras Petiliani* 3.21.25 (cf. 22.26).

ὁ μὲν γὰρ Δημοκρίτου γεγωνὸς ἑταῖρος, ὁ Πρωταγόρας, ἄθεον ἐκτίσατο δόξαν· λέγεται γοῦν τοιαῦδε κεκλήσθαι εἰσβολῇ ἐν τῷ Περὶ θεῶν συγγράμματι· “περὶ μὲν θεῶν οὐκ οἶδα οὔθ’ ὡς εἰσὶν οὔθ’ ὡς οὐκ εἰσὶν οὔθ’ ὅποιοί τινες ἰδέαν”.

デモクリトスの仲間であったプロタゴラスは、無神論者の評判を引き起こした。彼は少なくともこのような導入部を『神々について』という書き物で用いたと言われているから。「神々について、私は、あるとも、ないとも、姿形がどのようなものであるかも、知らない」。

エウセビオスはここで、プロタゴラスをデモクリトス、ヘラクレイトス、パルメニデスと対置して論じている。

同巻の少し後では、後2世紀のペリパトス派アリストクレスの『哲学について』第8巻を引用し、「人間尺度説」に先立って『神々について』を紹介している。

【T12 : Eusebius, *Praeparatio evangelica* 14.19.10 = Aristocles, *De philosophia* VIII, fr. 6 (Chiesara) = Cap. B7】⁽³⁴⁾

τὸν δὲ Πρωταγόραν λόγος ἔχει κεκλήσθαι ἄθεον. γράφων γέ τοι καὶ αὐτὸς Περὶ θεῶν εἰσβολῇ τοιαῦδε ἐχρήσατο· “περὶ μὲν οὖν θεῶν οὐκ οἶδα οὔθ’ ὡς εἰσὶν οὔθ’ ὅποιοί τινες ἰδέαν· πολλὰ γὰρ ἐστὶ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναί”. τοῦτον Ἀθηναῖοι φυγῇ ζημῶσαντες τὰς βίβλους αὐτοῦ δημοσίᾳ ἐν μέσῃ τῇ ἀγορᾷ κατέκαυσαν.

プロタゴラスは無神論者と呼ばれていたという説がある。彼は自身『神々について』を書くにあたり、このような導入部を用いた。「神々について、私は、あるとも、姿形がどのようなものであるかも、知らない。これらの各々を私が知ることを妨げるものは、多いから」。アテナイ人たちは彼を追放処分にし、彼の書物をアゴラの真中で公的に焼き払った。

この引用を先のエウセビオス自身の引用 (T11)、及び、DL (T1) と比べるといくつかの異同が観察される。主動詞が「知らない」と断定型になっている点、「ὡς οὐκ εἰσὶν」(ないとも)の句が抜けている点、“ἐστὶ με ἕκαστον τούτων”の4語が加わっている点で、DL と異なっている。理由を表す第2行はエウセビオス (T11) にはないが、“εἰδέναί”はDL (T1) から、“με”はセクストス (T9) とテオフ

(34) M.L.Chiesara, *Aristocles of Messene, Testimonia and Fragments*, Oxford, 2001, 36 : キエサラは、エウセビオスの2つの報告について、14.3(T11)はキケロ『神々の本性について』1.12.29 (T4)に近く、アリストクレスからの報告 (T12) はセクストス (T9) に対応するというジゴン説を紹介している (xxxii)。

イロス (T10) から確認される。不思議なことに、断片 4 の復元にあたってディールスはこの箇所を一切参照していない⁽³⁵⁾。

アリストレクスは「人間尺度説」批判との関係でプロタゴラスの『神々について』を引用するが、その文脈はプラトン『テアイテトス』に共通する。

ヨアンネス・クリュソストモスとテオドレトス(共に 4～5 世紀)には、資料上の繋がりも推測される。

【T13 : Joannes Chrysostomus, *In epistolam I ad Corinthios* 36 (Migne)】

καὶ γὰρ Πρωταγόρας παρ' αὐτοῖς, ἐπειδὴ ἐτόλμησεν εἰπεῖν, ὅτι οὐκ οἶδα θεοὺς...

プロタゴラスも彼らの仲間である。彼はあえて、神を知らないと言ったからである。

プロタゴラスは、ミレトス人ディアゴラス、無神論者テオドロス、ソクラテスと並んで論じられる。そこでの“Μιλήσιος”(ミレトス人)は、“Μήλιος”(メロス人)の綴り間違いであろう。

【T14 : Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 2.113 = Cap. A23, B7】

βδελύξεται δὲ καὶ Πρωταγόρου τοὺς ἀμφιβόλους περὶ τοῦ θεοῦ καὶ ἀπίστους λόγους· ἐκείνου γὰρ ἐστὶ τὰ τοιαῦτα· “περὶ μὲν οὖν τῶν θεῶν οὐκ οἶδα οὔτε εἰ εἰσὶν οὔθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὔθ' ὅποιοί τινες τὴν ἰδέαν εἰσὶν”.

プロタゴラスの神についての両義的で不信的な言説も、忌み嫌われた。彼の論とは、このようであった。「神々について、私は知らない。あるかどうか、ないことも、姿形がどうであるかも」。

ここでは、ディアゴラス、キュレネ人テオドロス、テゲア人エウエメロスの無神論が論じられ、ストア派が神的な事柄を物体とした学説に続いてプロタゴラスが挙げられる。テオドレトスもディアゴラスを「ミレトス人」と誤って記していることから、ヨアンネス・クリュソストモスと共通の典拠を用いていたことが判る。

テオドレトスの同著作 6.6 では、ディアゴラスに続いてプロタゴラスが、エピ

(35) DK. に先立って編纂された DG.535 では、キケロ (T4) の箇所に“Euseb. P. E. XIV 3. XII 19 [= Theodor. gr. aff. c. II 113]”と註記されている。エウセビオスへの言及の前者は T11 にあたるが、後者は XIV 19 (10) の誤りではないか。その場合、ディールスは T12 でのエウセビオス報告をテオドレトスの T14 と同一内容と見なしていることになる。しかし、両者は基本的に別である。なお、DK. の出典索引にも PE. 14.19.10 は含まれていない。カピッシ、101-102, n.2, 206-207 も参照。

クロスの前に論じられる。

【T15 : Theodoretus, *Graecarum affectionum curatio* 6.6】

Πρωταγόραν δὲ ἀμφίβολον περὶ γε τούτων ἐσηγήσθαι λέγουσι δόξαν· φάναι γὰρ αὐτὸν εἰρηκασιν οὐκ εἰδέναι οὔτε εἶπερ εἰσὶ θεοὶ οὔτε εἰ παντάπασιν οὐκ εἰσὶν.

プロタゴラスはこれら〔神々〕について両義的な考えを持っていたと人々は言っている。というのは、神々があるかどうか、まったくないのかも知らない、主張していたと言われるからである。

(5) 伝記的資料

プロタゴラスに関する伝記には、3世紀頃に書かれたディオゲネス・ラエルティオス「プロタゴラス伝」をはじめ4資料があるが、どれも他の思想家の列挙抜きに彼の神についての言説を紹介している⁽³⁶⁾。ディオゲネスの扱いは、既に見た(T1, R1)。

フィロストラトス(2～3世紀)の『ソフィスト列伝』では、神々についての発言をペルシア的教育の影響として説明している。そこでは、プロタゴラス裁判とその顛末(難破)も詳しく紹介されている。

【T16 : Flavius Philostratus, *Vitae sophistarum* 1.494 = DK. 80A2】

τὸ δὲ ἀπορεῖν φάσκειν εἶτε εἰσὶ θεοὶ εἶτε οὐκ εἰσὶ, δοκεῖ μοι Πρωταγόρας ἐκ τῆς Περσικῆς παιδείσεως παρανομήσαι.

プロタゴラスが、神々があるのか、ないのか分からないと主張して法を逸脱したのは、そのペルシア的教育ゆえであったと私には思われる。

ミレトス人ヘシュキオス(6世紀)に帰せられる『プラトン古註』(『国家』600cへの註)でも、引用がなされている。

【T17 : *Scholia Platonica ad Rep.* 600c = Hesychius Milesius, *Onomatologos* = DK. 80A3】

ἐκαύθη δὲ τὰ τούτου βιβλία ὑπ' Ἀθηναίων. εἶπε γὰρ “περὶ θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔτε ὡς εἰσὶν οὔτε ὡς οὐκ εἰσὶν”⁽³⁷⁾.

彼の書物はアテナイ人たちによって焼かれた。こう主張したからである。「神々について、私は知ることはできない。あるとも、ないとも」。

(36) これら4資料の関係については、拙論「プロタゴラス伝註解」参照。

(37) εἶτε ... εἶτε, Par.2622.

10世紀に編集された『スタ』の「プロタゴラス」の項目も、同様の紹介をしている。

【T18 : *Suda*, Π.2958 (Πρωταγόρας) = Cap. A3a】

τοῦ δὲ Πρωταγόρου τὰ βιβλία ὑπὸ Ἀθηναίων ἐκαύθη, διότι λόγον ποτὲ εἶπεν οὕτως ἀρξάμενος· “περὶ θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὔτε ὡς εἰσὶν οὔτε ὡς οὐκ εἰσὶ”.

プロタゴラスの書物はアテナイ人たちによって焼かれた。それは、彼が次のように始めて言論を語っていたからである。「神々について、私は知ることはできない。あるとも、ないとも」。

この引用が『プラトン古註』とほぼ同一であることから⁽³⁸⁾、両者が共通の資料に依拠していることは確実である。

プロタゴラスの神についての言説は、他の不敬神(無神論)者と並べて扱われるのが通例であったが、これら4つの伝記的資料とアリストクレス(T12)では、単独で扱われている。

3、断片と伝承の復元

プロタゴラスの次世代からビザンツまでの伝承を辿り、18の証言を見てきた。元は1つであった著作冒頭部の1節をめぐって、異なった文脈と背景から引用された各証言は、その異同において伝承の性格を示している。それらの異同を部分ごとに整理してみよう。まず、著作冒頭は、標題にもなった「神々について」という1句であるが、引用の仕方も反映してか、小辞の有無や組み合わせ等にヴァリエティがある。

【1、冒頭箇所】

- 1a) *περὶ θεῶν* : リバニオス (T8)、プラトン古註 (T17)、スタ (T18) ;
de divis : キケロ (T5)
- 1b) *περὶ μὲν θεῶν* : DL (T1)、エウセビオス (T11)、[DK]
- 1c) *περὶ δὲ θεῶν* : セクストス (T9)
- 1d) *περὶ μὲν οὖν θεῶν* : アリストクレス (T12)
- 1e) *περὶ μὲν οὖν τῶν θεῶν* : テオドレトス (T14)

著作の書き出しとして接続詞がない場合(1a)もあるが、小辞“μὲν”で始まる

(38) 校訂本では文末の“ἐστιν”のニューの有無だけが異なっている。

場合 (1b) には、対応する “δὲ” の文が後にあったのか⁽³⁹⁾、単独用法 (μὲν solitarium) であったかのいずれかとなる。著作冒頭に “δὲ” がくる場合 (1c) もあり⁽⁴⁰⁾、“μὲν οὖν”(1d, 1e) も含めて決定はし難い。

次に主動詞と様相の有無にヴァリエーションがある。大きく分けて 2 パタン (とその合成) が見られる。

【2、主動詞】

2a) οὐκ οἶδα : エウセビオス (T11)、アリストクレス (T12)、[ヨアンネス・クリュソストモス (T13)]、テオドレトス (T14) ; μὴ εἰδέναι : オイノアンダのディオゲネス (T7) ; οὐκ εἰδέναι : テオドレトス (T15) ; [ἀγνοεῖν : テュロスのマクシモス]

2b-1) οὐκ ἔχω εἰδέναι : DL (T1)、プラトン古註 (T17)、スダ (T18)、[DK]

2) [ἀγνωστον : フィロデモス (R3)]

3) ἔκ τε τοῦ λέγειν καὶ τοῦ γράφειν ἐξαιρώ : プラトン (T2)

4) οὔτε δύναμαι λέγειν : セクストス (T9)

5) οὐ δύναμαι λέγειν οὔτε δηλώσαι : テオフィロス (T10)

6) neque ... habeo dicere : キケロ (T5)

7) neutrum licuerit : キケロ (T6)

8) [ἀπορεῖν : フィロストラトス (T16)]

2c) (=2a+2b) οὔτ' εἰδέναι οὔτε δύνασθαι ἀθρήσασθαι : テイモン (T3)

「知らない」という断定の読み (2a) は、オイノアンダのディオゲネスの解釈の基盤となっている。その後は、エウセビオスやテオドレトスらキリスト教徒の報告に限られ、「無神論者」という性格づけと相即する。

事実の断定ではなく、可能性の否定とする言い方が (2b) である。知の不可能性 (2b-1) は、プラトン古註、DL、スダといった学説誌の系統に見られ、より原典に近いとも考えられる。但し “οὐκ ἔχω λέγειν” という形は報告されていない。「知る」という動詞が使われていたか、「語る」といった系統の動詞が用いられたかは、俄には決定し難いが、2a 系統の伝承との最大公約数としては「知り得ない」(2b-1) が有力であろう。

(39) W.Kranz は “περὶ δὲ ἀνθρώπων ...” 「人間については」と続いたとの推定を註記している (DK. II.265)。

(40) このやや不自然の用法は、ヘラクレイトスの著作冒頭にあったとされる DK. 22B1 に見られる。J.D.Denniston, *The Greek Particles*, 2nd ed., Oxford, 1950, 173 の説明では、神託等において通説に異を唱える用例が挙げられている。

【3、目的節の選択肢】

目的節の選択肢については、組み合わせで3パターンに分けられる。

3a) 2者選択「ある／ない」

- 1) ὡς εἰσὶν ἢ ὡς οὐκ εἰσὶν : プラトン (T2)
- 2) οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν, BP [εἴθ' ὡς εἰσὶν εἴθ' ὡς οὐκ εἰσὶν, FD] : DL (T1)
- 3) neque ut sint neque ut non sint : キケロ (T5)
- 4) nec esse deos nec non esse : キケロ (T6)
- 5) εἴτ' εἰσὶν εἴτ' οὐκ εἰσὶ : リバニオス (T8)
- 6) οὔτε εἴπερ εἰσὶ θεοὶ οὔτε εἰ παντάπασιν οὐκ εἰσὶν : テオドレトス (T15)
- 7) οὔτε ὡς εἰσὶν οὔτε ὡς οὐκ εἰσὶν [εἴτε ... εἴτε, Par.2622] : プラトン古註 (T17)
- 8) οὔτε ὡς εἰσὶν οὔτε ὡς οὐκ εἰσὶ : スダ (T18)
- 9) εἴτε εἰσὶ θεοὶ εἴτε οὐκ εἰσὶ : フィロストラトス (T16)

3b) 2者選択「ある／どのようなか」

- 1) ὁποῖοί τινές εἰσι καὶ εἴ τινες : テイモン (T3)
- 2) οὔτε εἰ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοί τινές εἰσι : セクストス (T9)
- 3) εἴτε εἰσὶν θεοὶ ... οὔτε ὁποῖοί εἰσὶν : テオフィロス (T10)
- 4) οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν : アリストクレス (T12)
- 5) [εἴ τινες εἰσὶ θεοὶ ἢ ποῖοί τινές εἰσὶν : フィロデモス (R3)]
- [6) εἰ θεοὶ εἰσὶν : オイノアンダのディオゲネス (T7) ; 1 選択肢のみ]

3c) 3者選択「ある／ない／どのようなか」

- 1) sint non sint qualesve sint : キケロ (T4)
- 2) οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοί τινες ἰδέαν : エウセビオス (T11)、[DK]
- 3) οὔτε εἰ εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὁποῖοί τινες τὴν ἰδέαν εἰσὶν : テオドレトス (T14)

DL、フィロストラトス、プラトン古註、スダという伝記系は3aを採っており、共通する資料に由来することが推定される。3b-1,2については、テイモンを引用したセクストスはそのパラフレイズに引きずられていることが推測される。オイノアンダのディオゲネスによる批判がおそらく3b系統の読みに依拠していることは、前述の通りである(仮に3b-6とした)。

3bの2者選択ではなく、3aのような対か、それを基本とした3cがプロタゴ

ラスにより相応しいと考える、外在的な証言がある。

【R6 : Seneca, *Epistulae Morales* 88.43-45 = DK. 80A20】

Protagoras ait de omni re in utramque partem disputari posse ex aequo et de hac ipsa, an omnis res in utramque partem disputabilis sit... Si Protagoras credo, nihil in rerum natura est nisi dubium;

プロタゴラスは、あらゆる事柄について、どちらの側でも同等に論じることができ、正にこの事柄、つまりすべての事柄についてどちらの側でも論じられるということについてもそうだと主張した。(略)もしプロタゴラスの言うことを信じれば、物事の本性において疑わしくないものはないことになる。

セネカは神の話題を取り上げていないが、プロタゴラスが扱う対象には「神々がある／ない」という対置も含まれていたであろう。「人間尺度説」における「ある／ない」の対置もこれに相応し、DLが2著作冒頭部を続けて引用した9.51では表現も対を成している。これらの引用は「すべての事柄について互いに対立する2つの言論がある」という主張を紹介した直後になされており、連関が意識されているはずである。プラトンが『ソフィスト』で、ソフィストを「すべてのことに反論する(ἀντιλέγειν)能力」と規定するにあたり、あえてプロタゴラスの名を挙げていることも想起される⁽⁴¹⁾。他方で、プロタゴラスの元の意図が神々の「ある／ない」の両方に向けられていたとすると、オイノアンダのディオゲネスの批判が片面に偏ったものであったことが判る。

以上3系統を統合的に理解するには、元来3cの3選択肢であったが、伝承の過程でどこかが省略されていったとの推定がなされる。

【4、目的節の接続詞】

目的節を導く接続詞にも、間接疑問文を導く“εἰ”(または“εἴτε”)と実詞節を導く“ὥς”の2種が見られる。

4a) εἴτε: ティモン (T3)、オイノアンダのディオゲネス (T7)、リバニオス (T8)、セクストス (T9)、テオフィロス (T10)、フィロストラトス (T16)、テオドレトス (T15)、[フィロデモス (R3)]

4b) ὥς: プラトン (T2)、DL (T1)、エウセビオス (T11)、アリストクレス (T12)、プラトン古註 (T17)、スタ (T18)

(41) *Sophist* 232b-233c; プロタゴラスの「レスリングについて」が232d-eで言及される。ウンターシュタイナーは「神々について」を『反論集』の一部として論じている(註6参照)。

4c) 両者の混合：テオドレトス (T14)

表現として 4a には懐疑的なニュアンスが、4b には不可知論的なニュアンスが感じられるが、主動詞における「断定／可能性否定」に必ずしも対応してはいない。「ある／どのようであるか」の 2 者選択をとる証言 (3b) では、アリストクレスを例外として“ei”の系統 (4a) が用いられているが、構文上はそれが自然である。アリストクレスの場合、本来 3 つあった選択肢の 1 つが脱落した可能性が高く、引用者エウセビオスは自身の記述 (T11) では別資料を用いてより精確に報告していることになる。

4a の表現を想起させる古典的な 1 節がホメロス『イリアス』第 5 巻 183 行にある：“σάφα δ’ οὐκ οἶδ’ εἰ θεός ἐστιν.” 「私は彼が神かどうか、知らない」。そこでコプラとして用いられていた動詞“ἐστίν”が、前 5 世紀後半に (チャールズ・カーンの研究ではギリシア語史上初めて) 神に関して「存在する」という意味に転用されたとすると、プロタゴラスがホメロスの章句をもじった可能性も考慮される。他方で、後世の人々がこの章句に引きずられて引用したという逆の可能性も無視できない。神々をめぐる表現の文化的背景も、プロタゴラスの発言を理解する上で重要となる。

【5、理由節】

- 5a) πολλὰ γὰρ τὰ κωλύοντα εἰδέναι : DL (T1), [DK]
 5b) πολλὰ γὰρ ἐστὶν τὰ κωλύοντά με : テオフィロス (T10)
 5c) πολλὰ γὰρ ἐστὶ τὰ κωλύοντά με : セクストス (T9)
 5d) πολλὰ γὰρ ἐστὶ τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναι : アリストクレス (T12)
 5e) ἢ τ’ ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου : DL (T1) のみ、[DK.]

まず、理由節前半の諸類型は、アリストクレス (5d) をもっとも完全な形とする各所の欠損型に整理される。ディールスは DL 報告 (5a) をそのまま採用しているが、テオフィロスとセクストスとエウセビオスの 3 者 (5b, 5c, 5d) に意味上の主語“με”が残っていることから、それが元からあったのは蓋然的である。また“με”が含まれていたとすると、それが動詞“εἰδέναι”と目的語“ἕκαστον τούτων”(5d) を伴っていたと考えるのが自然であろう⁽⁴²⁾。文章が長い場合にはコプラ動詞“ἐστὶ”も省略されずにあった可能性が高い。

(42) 動詞 κωλύω は、目的語に対格と不定詞を伴うのが通常である。LSJ は人の対格のみを目的語とする用例を 2 つ挙げているが、不定詞のみをとる用法を独立に論じてはいない。

理由節後半は、DLにしか報告がないことから、カピッシはディオゲネスによる説明であるとして「断片」から落としている。だが、やや凝った言い回しであり、不完全な文章であることが、逆にプロタゴラス自身の言葉である可能性を示すのではないか。従って、元来は5d+5eの形であったことが推測される。

以上の検討から、プロタゴラスの原文と推定されるものを提案したい。

【6、復元提案】

περὶ μὲν θεῶν οὐκ ἔχω εἰδέναι οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί
τινες ιδέαν· πολλὰ γὰρ ἐστί τὰ κωλύοντά με ἕκαστον τούτων εἰδέναι, ἢ τ'
ἀδηλότης καὶ βραχύς ὢν ὁ βίος τοῦ ἀνθρώπου.

神々について私は、あるとも、ないとも、姿形がどのようなものであるかも、知ることができない。これらの各々を私が知るには障害が多いから。その不明瞭さや、人間の生が短いこと。

4、結論

『神々について』冒頭部はきわめて多様な仕方で伝承されており、復元はそれ自体ではあまり意味を持たない。むしろ異なった伝承間の関係の検討が、プロタゴラスがどのような文脈でどう理解されてきたかを映し出す手掛かりとなる。また、原文を想定することで、その後の伝承で被った変化を仮説的に説明することが可能になる。

伝承における変容の1例が、目的節にあたる選択肢のパターンに観取される。選択肢が元来“οὐθ' ὡς εἰσὶν οὐθ' ὡς οὐκ εἰσὶν οὐθ' ὅποιοί τινες ιδέαν”(あることも、ないことも、どのようなものであるかも)と3つであったとすると、第2の選択肢を落として「あるかどうか、どのようなであるか」とするか、第3の選択肢を落として「あるか、ないか」とする伝承が分かれたことになる。前者が早い時期に流布していたことはティモンから知られるが、そこからオイノアングのディオゲネスのような誤解に基づく批判が生じた事情が説明される。

他方で、元来懐疑的な挑発であったプロタゴラスの発言が、次第に「無神論者」に同化される過程もほぼ確認することができる⁽⁴³⁾。プロタゴラスの立場は、

(43) 「不敬神裁判」についてのリストと「神存在否定論者」の学説誌リストが別に存在し、それら2系列が時代と共に混淆されたものと推測される(C.W.Müller, 'Protagoras über die Götter', C.J.Classen ed. *Sophistik*, Darmstadt, 1976, 328-329 (原、

初期には比較的慎重に扱われ「無神論者」に含められていなかったが⁽⁴⁴⁾、後に「無神論者」と同列に扱われ、実際そう呼ばれたりもする⁽⁴⁵⁾。「知ることができない」という懐疑的、不可知論的な発言も、古代後期の「無神論」批判に回収され、主にキリスト教徒の間では「知らない」という断定形に置き換わったのかもしれない。

プロタゴラスの神々についての言説は、元来はあらゆることに向けられた彼の両面的言論の1ケースであったのであろうが(R6参照)、その後限定された文脈でくり返し取り上げられ、古代における神をめぐる議論の一角を占めたのである。

(慶応義塾大学)

Hermes 95, 1967), G.B.Kerferd, *The Sophistic Movement*, Cambridge, 1981, 164)。詳細な調査は今後に期したい。

- (44) 偽プルタルコス、ストバイオスが依拠するアエティオス学説誌、及び、エピクロスについての考察(フィロデモス、R4)を参照。
- (45) アリストクレス(T12)、エウセビオス(T11)、アウグスティヌスには「無神論者」という呼称が含まれる。オイノアンダのディオゲネス(T7)、セクストス(T9)、テオフィロス(T10)も実質的にそう扱っていた。